

TIJ 日本語教育研究会通信

No.43 2010.9.17 発行

発行: TIJ日本語教育研究会事務局
東京都葛飾区新小岩1-17-10
Tel:03(5607)4100 /Fax:03(5607)4102
E-mail tij@tij.ne.jp
TIJ ホームページ <http://www.tij.ne.jp>



台風が通過して、長く続いた熱帯夜に一応区切りがついたかと思います。ただ、昼間はこれからも30度を超える日が続くようですので、疲れが出ないように体調管理に努めたいものです。

8月3日4日に日本語学校教育研究大会がありました。日振協主催で毎年夏に開催されているのですが、現在の日本語教育の流れや抱えている問題点など、普段自分の機関の中にいたのではわからないことに気付かされるよいチャンスとなっています。この大会に参加しての報告を本号に掲載しましたので、ご一読ください。

昨年から続けてきました「上級で学ぶ日本語」文型勉強会報告を掲載いたしましたので、お読みいただき、ご意見をいただきたいと思えます。

また6月21日に開いたOPI (oral proficiency pilot test 口頭能力測定試験)の勉強会では、外国人学習者の口頭コミュニケーション能力を測定する方法について勉強しました。その報告も掲載いたしました。

今年も獨協大学の学生さんがTIJで約3週間教育実習をしました。授業見学をしたときに若い方の気づきに私たちの方が目をさまされることもあります。また、考え方や教え方に対して柔軟に対応できるところに若い方の可能性を感じます。

「上級で学ぶ日本語」勉強会については、巻末事務局からのお知らせをご覧ください。

【本号の内容】

1. 日本語学校教育研究大会報告 1
2. 日本語学校教育研究大会報告 2
3. 「上級で学ぶ日本語」文型勉強会報告
4. 勉強会の報告—OPIについて
5. 教育実習レポート
6. 仮称「はじめよう日本語初中級」作成について
7. 事務局からのお知らせ

平成22年度日本語学校教育研究大会報告1

日本語学校の専門性と開発力

8月3日に開かれた日本語学校教育研究大会第一日目のパネルセッションでは「日本語学校の専門性と開発力」という課題のもとに発表と討議がされました。その中で、日本語学校の仕事として①リクルーティング②アドバイジング③教育④研修や教員養成の4つの大項目が挙げられ、①②③の観点から、それぞれ2つの学校から具体的に行っている活動の報告がありました。

それを聞いて私が考えたことは、学校は社会に認知され評価される学校力を持つべきであり、その学校力とは①リクルーティング力②アドバイジング力③教育力④教員養成力の総和であるということでした。今まで私の頭の中では、「教育力」の占める割合が高かったのですが、今回の教育大会に参加し、教育力だけではないということに改めて気付かされました。とくにアドバイジングについては、今までなかなか継続的な活動ができず、T I Jにとっての大きな課題でありました。お話を伺った中で印象に残ったことは

1. オリエンテーションは来日前のオリエンテーションを含め、折にふれて何度も行うべきであること
2. 学生情報の共有化を行い、担当が変わっても点としての情報にならないよう、学生一人一人について連続した線及び面として情報の把握をしていくことが重要であること、それが学校への信頼につながっていくこと

でした。これを具現化する方法の一つが「ポートフォリオを活用した学生サポート」というタイトルでポスター発表の中にありました。これをヒントにT I Jで今後どのようにやっていきたいかは次の渡部さんのレポートにありますので、ご覧ください。

もう一つ、肝に銘じなければいけないと思ったことは、「日本語学校と留学エージェント（または学生）は選ばれる関係であり、選ばれるためには、学校差別化を図るべきである。つまり、他の学校とは違う明確な特徴を持つべきである。またさらに、それを広報するべきである。」ということ。これも当たり前のことであり、以前からわかっていたことではありますが、さらに具体化明確化し、広報にも努める必要があります。

さらに、③教育の発表の中にあつた「学習者の主体性、自主性を引き出すことを目指し、授業、授業外を問わず学習者が自分自身に問いかけ、その問の答えを自身で見出そうとすることを目指して、支援を展開している」という点も私たちが心していかなければいけないことだと再度肝に銘じました。

日本語学校教育研究大会は、今年も自分たちのやっていることを振り返るいい機会になりました。

広瀬万里子

平成22年度日本語学校教育研究大会報告2

ポートフォリオを活用した学生サポート

8月4日の「ポートフォリオを活用した学生サポート」のポスター発表を見学した。テーブルの上においてある「わたしカルテ」と題したB5版のファイルが、そのポートフォリオだという。手に取って中を見せていただき、これが一人の学生の日本到着直後から卒業までの間、担任教師との間でやりとりされた記録の蓄積であることがわかった。入学直後のページには、「2年後のあなたは、どこで、何をしていますでしょう」「この日本での生活の目標」とある。「目標」をたてることは、この後、「今月の目標」、1月には「新年の目標」などのかたちで、何度となく学習者に自分の目標を考え、確認させるようになっている。

このほかに、学期ごとの成績表、出席率、教師からのコメント、模擬試験の結果、留学試験、能力試験の結果なども綴じこまれている。これらの学生に関する情報に加えて、「ジャーナル」と呼ばれるページがある。学生たちが日々感じたことを書き、それに教師がコメントして返却したもので、これが全体で一番多くのページ数を占めていた。ウィークデーに提出されてきたものに教師がコメントを書いて金曜日に返却するというペースだったという。びっしりとそのときの学生の思いが書き込まれているものもあれば、教師からのコメントで埋め尽くされているページもある。

この「わたしカルテ」は、学生への生活面、心理面、学習面のサポートに大変役立つとの報告であった。確かに、個々の学生にアドバイスをする際に、その学生についての成績、生活面の情報がこのファイルに集約されていることはアドバイスする側からすると大変ありがたいことである。また、面談でアドバイスしたことを書いてファイルに残しておくことで、そのアドバイスを学生本人とも他の教師とも共有できることは大きなメリットである。学生にとっては、2年間の在学期間中、折に触れて自分の姿を振り返り、自主的に自分の目標を確認、修正し、そのために自分のすべきことは何か、と考えて行動する姿勢を持つ助けとなる。また、様々な形で在学期間中に学生に接する教師や職員にとっても学生についての情報が可視化され共有できることは学校全体での学生の多面的サポートに大いに役立つだろうと考える。

卒業時にはこの「わたしカルテ」は学生にプレゼントされるという。何年かたって、日本語学校での生活を懐かしく思い出し、これを開いてその時の自分の歩みを辿ってみる・・・そういう風に使われることを想像すると楽しい。

2日間にわたった今回の「教育研究大会」で、いくつかの発表から私が共通に感じたことは、「目標の明示」「情報の可視化」による、「情報の共有」という観点の大切さである。このことは学生サポートにおいて、学生の生活・学習指導において、また総合科の学習項目の提示において等々、様々な切り口で示された。

ともすれば、目の前に現れる現象に対応することに追われがちな毎日であるが、一呼吸おいて、一人の学生がこの学校にいる2年間というスパンで、全体像を眺めることの大切

さを痛感し、触発された 2 日間であった。

渡部尚子

「上級で学ぶ日本語」文型勉強会報告

上級で学ぶ日本語・10 課・使いましょう

A ～際ニ／～際して

本文：昨年開かれたアジア環境会議に出席した際に、(中略)若いボランティアを紹介された。

接続：A-1 ～の際に～します/しました

A-2 ～する際に～します/～しました

A-3 ～した際に～しました

A-4 名詞・動詞+に際して

意味：「とき」に言い換えられるが「とき」よりも硬い言い方。

「際して」は何かをする(が起こる)ときにあたって。

導入：・入院の際に用意していただくもの・・・

非常の際には、係員の指示に従って・・・

(降車時)料金はお降りの際に、お支払いください

お降りの際には、お忘れ物のないように・・・

・核安全保障サミットに出席した際に、鳩山氏がオバマ大統領と会談できたのはわずか 10 分間だった。

日本へ来る際に、いろいろな方にお世話になりました。

・施設ご利用に際して・・・、お申し込みの際して・・・

(公共施設等のパンフレットに注意事項記載)

—— 「～にあたって」に言い換えられる

1. この件に関しては次の会議の際に、結論を出すことにいたします。

2. 二酸化炭素の削減/ごみのリサイクル/ごみのリユースはエネルギー問題を考える際に、何よりも優先されるべきだ。

3. 三年前海外旅行をした際に、初めてパスポートを作りました/そのデジタルカメラを買いました。/初めて飛行機に乗りました。

(海外旅行を具体的な地名にしたほうが作り易い。

・・・三年前中国を旅行した際に、古い友人の陳さんに再会できました。)

4. オリンピックを開催するに際して、多くのボランティアの協力が必要です。

〃 新たに多くの競技施設が建てられました。

5. 調査の実施に際して、学識者の意見が取りまとめられた。

〃 周辺住民の了解を得なければならない。

〃 プライバシーの保護は最優先されるべきだ。

※4. 5は「～にあたって」前準備の意味を表す。

B ～からには

本文：学歴社会で生きていくからにはと、かわいそうだと思いながらも、いやおうなく塾へ通わせてたんでしょう。

接続：動詞＋からには

意味：「ある状況になった以上は、最後まで貫く。他の選択がない／しない」という表現。

「～する以上は」「～した以上は」と同じ意味

依頼、命令、意志、当為(そうすべき事)などを表す文に用いる。

導入：

- ・ 覚悟して日本へ来たからには、頑張って自分の目的を果たしたい。
 - ・ 仕事と子育てを両立させると決めたからには、ある程度の困難は覚悟している。
 - ・ 最近は大人家族というのが話題になっているが、社会人になったからには、親から自立することを考えるべきだ。
- 1、社会人であるからには、当然公私ともに責任ある行動をしてほしい／自分の行動に責任を持つべきだ／常識ある行動をするべきだ。
 - 2、彼がそう言うからには、必ずやり遂げるに違いありません。
〃 事実に／そうに／本当に違いありません。
 - 3、一度やろうと決めたからには、最後までやり通すべきだ／最後までやるつもりです。
〃 途中で投げ出すべきではない。
 - 4、プロが一度仕事を引き受けたからには、どんなことがあってもやり遂げなければなりません。
たくさんのお客さんがいらっしゃるからには、ちゃんと準備しなければなりません。
みんなの前で発表するからには、いいものを作りたい。
 - 5、この人を信じると決めたからには、無罪を勝ち取るまで裁判で戦っていこうと思う。
彼は無実だと信じたからには、 〃
父が反対するからには、この結婚はあきらめなければならない。
飛行機が飛ばないときまったからには、今日の出発はあきらめなければならない。

C ～割に(は)

本文：努力の割には、成績が中の上から上にはいかなかった・・・

接続：名詞＋の割には・な形容詞＋な割には・い形容詞＋い割には・動詞＋割には

意味：前件から常識的に予想される基準と比較すればということを表す。

プラス評価、マイナス評価とも使える。

導入：

- ・あのレストランは、値段の割には、材料も良いものを使っているし美味しいと評判だ。
- ・彼は日本に十年住んでいる割には、日本のことをあまり知らない。

1. いつも遊んでいる割には、彼はテストではいい成績をとっている。
2. 話すのが上手な割には、彼のレポートは文章がなっていない。
 " テストでいい点がとれない。
 " アルバイトの面接がうまくいかない。
3. 外国人労働力の導入／環境破壊／基地問題 について、新聞紙上などで取り上げられている割には、それに関して無関心な人が多いです。
4. あの歴史映画／ドラマ は制作費が安い割には、時代考証／内容はよくできています。
値段が安い割には、このカバンはよくできている。
初級の学生が書いた割には、この作文はよくできている。
5. 学生時代、勉強した割には、あまりいい成績が取れなかった。
彼は、いつも忙しく仕事をしている割には、お金がたまらないと言っている。
民主党は初めの勢いの割には、政策が迷走していて、国民の支持が離れてしまった。
今回の事業仕分けは国民が期待していた割には、思ったほど成果がでなかった。

D ～ものなら

本文：できるものなら、自分で自分のやったことを評価できる今の生活が続けられれば、それに越したことはない。

接続：動詞＋ものなら 動詞の可能形／可能動詞＋ものなら

意味：実現する可能性の少ないことに関して、「もし実現した場合は」と仮定する

「～ものなら～たい」の文型で使われることが多い。

導入

- ・A：試験前には、アルバイトを休んで勉強に専念してください。
- ・B：休めるものなら、休みたいですよ。でもそんなことしたら、すぐやめさせられちゃいますよ。

・できるものなら、米軍基地は日本にないほうが良いと思うんですが・・・。

1. できるものなら、夏は一カ月ぐらい涼しい所で暮らしたいです。
2. 会社に希望を聞いてもらえるなら、今回の転勤はなしにしてもらいたい。
この作業やってもらえるものなら、誰かにやってもらいたい。
一人暮らしをしていると、誰かに食事を作ってもらえるものなら、作ってもらいたい
と思うことがある。
3. 入院せずに済むものなら、なんとか自宅療養で完治させたい。
4. こんなたいへんな仕事、やめられるものなら、今すぐにでもやめたい。
5. 生まれ変わるものなら、鳥になりたい。

昔にもどれるものなら、もどりたい。

山本けい子

勉強会の報告—OPIについて

1 はじめに

OPIとは、ACTFL（全米外国語協会）によって開発された会話能力試験のことで、正式名称はOral Proficiency Interviewである。OPIは、汎言語的に使用できるという特徴を持つ。テストと被験者が1対1で最長30分のインタビューにより行われる。「今ここで何がこの人にできるのか」を調べるもので、言語についての知識を問う試験ではない。

2 判定尺度

ACTFLの判定尺度は、超級、上級、中級、初級の4つの主な言語運用能力レベルから成る。超級を除く各主要レベルには、それぞれ上・中・下の下位レベルがある。つまり、「初級 - 下」「初級 - 中」「初級 - 上」「中級 - 下」「中級 - 中」「中級 - 上」「上級 - 下」「上級 - 中」「上級 - 上」「超級」という10段階で判定される。

3 判定基準

OPIでは、総合的タスク／機能、場面と話題、正確さ、テキストの型の4つを評価基準として設定している。正確は、流暢さ、文法、語用論的能力、発音、社会言語学的能力、語彙の6つから成る。

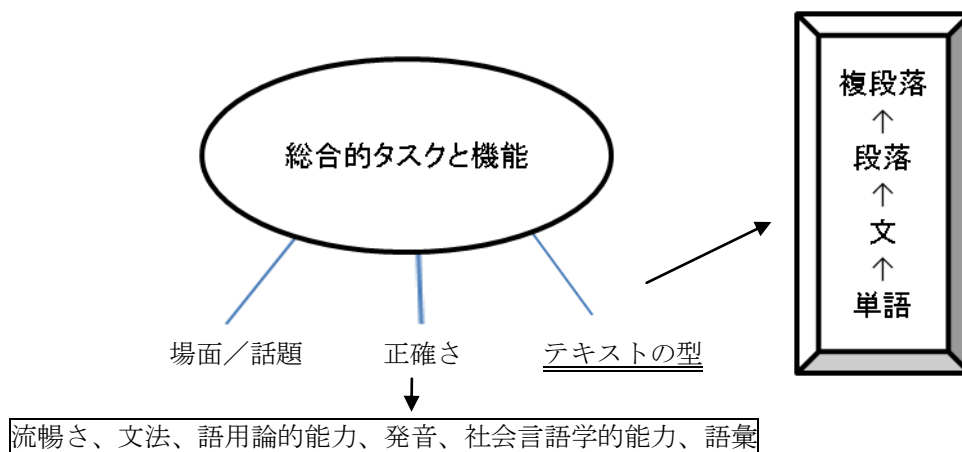


図1 OPIの4つの評価基準分野 嶋田（2008：50）

図1で示したように、最も重要なのは総合的タスクと機能であり、それを支える3つの柱が場面・話題、正確さ、テキストの型である。教師は学習者の正確さに注視しがちだが、

この図を見るとわかるように、例えば文法的な正確さは極めて小さい比重しかない。次に、レベル別の4つの判定基準を表1に示す。

表1 判定基準—話技法（マニュアル:41）

運用能力レベル	総合タスクと機能	場面／話題	正確さ	テキストの型
超級	いろいろな話題について広範囲にぎろんしたり、意見を裏付けたり、仮説を立てたり、言語的に不慣れな上級にも対応したりすることができる	ほとんどのフォーマル/インフォーマルな場面／広範囲にわたる一般的興味に関する話題、およびいくつかの特別な関心事や専門領域に関する話題	基本的言語構造に関してはパターン化した間違いがない。誤りがあっても、実質的には、コミュニケーションに支障をきたしたり、母語話者を混乱させたりすることはない	複段落
上級	主な自生の枠組みの中で、叙述したり、描写したりすることができ予期していなかった複雑な状況に効果的に対応できる	ほとんどのインフォーマルな場面といくつかのフォーマルな場面/個人的・一般的な興味に関する話題	母語話者でない人との会話に不慣れな聞き手でも、困難なく理解できる	段落
中級	自分なりの文を作ることができ、簡単な質問をしたり相手の質問に答えたりすることによって、簡単な会話なら自分で始め、続け、終わらせることができる	いくつかのインフォーマルな場面と、事務的・業務的な場面の一部/日常的な活動に関する、予想可能で、かつ身近な話題	母語話者でない人との会話に慣れている聞き手には、何度か繰り返すことによって、理解してもらえる	文
初級	丸暗記した型通りの表現、単語の羅列、句を使って、最小限のコミュニケーションをする	もっともありふれた、インフォーマルな場面/日常生活における、もっともありふれた事柄	母語話者でない人との会話に慣れている聞き手でさえ、理解するのが困難である	単語と句

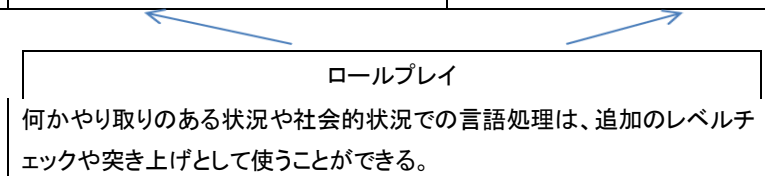
4 OPIの構造

最長30分のインタビューは、大きく4つの段階から成り立っている。1つめは導入部で、被験者との雰囲気作りが大きな目的である。さらにこの段階でテストは会話の話題となりそうな被験者の興味を引き出す。次にレベルチェックの段階がある。ここでは、被験者が楽にできるレベルを確認する。3つ目は、突き上げと呼ばれる段階で、被験者の能力の

上限を探る。最後の段階である終結部では、会話のレベルを被験者が楽にできるレベルに戻し、被験者が十分話すことができた満足できるようにする。

表 2 OPI の4つの段階 (マニュアル:45)

導入部	反復過程		終結部
	レベルチェック	→ ← 突き上げ	
OPI の最初の段階は、インタビューの導入部である。この段階は、被験者にとって気楽でむりのないと思われるレベルであいさつや方の凝らない簡単なやり取り、会話の糸口となるような話で構成される。OPI は、会話ができる中級レベルを想定して始まる。	被験者がインタビューに慣れ目標言語をある程度リラックスして、楽に使っているように見えたら、OPI の次の段階であるレベルチェックに移る。試験官は、あるレベルを特徴づけるタスクができるかどうか観察できるように、いくつかの異なる種類の話題について会話を進めていく、レベルチェックは、被験者の無理なく話せるレベルを見極める質問をする。すなわち、着実に、しかも、正確に処理できるレベルを判定し、そのレベルで必要な言語運用、言語的なタスクや場面を表出させることである。	あるレベルのタスクと話題をこなすことができる確認があれば、次の段階の突き上げに進む、突き上げの目的は、インタビューを次の上のレベルに押し上げることによって、被験者の運用能力の上限または限界、すなわち、言語的に何ができないかそのパターンを発見することである。	最後の段階は被験者の運用能力を楽なレベルに戻し、OPI を肯定的な雰囲気で終結させることである。



ロールプレイ
 何かやり取りのある状況や社会的状況での言語処理は、追加のレベルチェックや突き上げとして使うことができる。

ロールプレイは通常突き上げが終わった段階で行われ、それまでのインタビュー会話では測れないものを見る。たとえば、「叙述・描写・比較」といったものは、会話で十分表出させることができるが、「依頼・交渉」といった機能は、会話では見ることができない。ロールプレイを行うことで、このような機能も判定できる。

5 おわりに

今回の勉強会では、OPI についての概要を紹介した。

筆者は、OPI テスター資格取得のためのワークショップを受講し、会話能力測定の一つの尺度を自分の中に持つことができた。さらに、ワークショップの中で、自分のインタビューを聞いたり、他の 9 名のインタビューを聞いて判定したりという活動を通し、自分の授

業を振り返ることもできた。OPI は、会話能力テストとしてだけでなく授業の向上を目指す上でも有効なものであると思う。

《参考文献》

The ACTFL Oral Proficiency Interview Manual(1999)

鎌田修・嶋田和子・迫田久美子編著 (2008)『プロフィシェンシーを育てる一真の日本語能力をめざして』凡人者

鎌田修・堤良一山内博之編著 (2009)『プロフィシェンシーと日本語教育』ひつじ書房

嶋田和子 (2008)『目指せ、日本語教師力アップ！OPI でいきいき授業』ひつじ書房

牧野成一他 (2001)『ACTFL OPI 入門』アルク

山内博之 (2005)『OPI の考え方に基づいた日本語教授法―話す能力を高めるために―』ひつじ書房

大隅紀子

教育実習を終了して

獨協大学 二川 恵

今回T I Jで教育実習をさせていただいて、多くのことを学びました。実習前に大学で指導は受けていたのですが、実際に学生に授業をするのは初めてで不安でした。しかしT I Jに来てからは、日本で日本語を勉強する生徒をもっと知りたいと日に日に強く思いました。まず、学生の日本語を話そうとする意欲が強いのに、驚きました。先生に促されなくても、答えられるところは、自分から積極的に答える姿勢に感動しました。特に初級の作文の授業では、考える時間が短いにもかかわらず、しっかり自分の意思を文章に表わしていました。中級になると、難しい言葉も使えるようになり、一文の長さが変わりました。先生方の授業を見学させていただいて、生徒がこんな自発的に話しているのは、生徒がもっと話したいと思えるように先生方がしっかり誘導しているからだわかりました。テキストの内容をただなぞるだけの授業ではなく、どの先生も必ずテキストには載っていない言葉や表現を積極的に取り入れていました。

私もさまざまな場面を想定できて、生徒がもっと話したいと強く思える授業づくりを心がけましたが、実際に教壇実習をしてみると、説明に走ってしまい生徒から言葉をうまく引き出すことができませんでした。普段使い慣れている言葉を、より短く、よりわかりやすく説明することに苦労しました。また普段使っている言葉の多くが省略されていて、若者言葉など日本人にとって無意識の省略が、生徒にとっては全く異なる言葉に聞こえるのだと実感しました。予習をしっかりする生徒が多かったので、初めての教壇実習は生徒に助けられながら終えました。

一回目の教壇実習では、言葉による説明をしてしまいがちでしたが、指導を受けてからは動作を取り入れて目に見える形で表現しました。二回目の教壇実習では、絵カードやジェスチャー、小道具など目に見えるものをできるだけ使用して、説明の言葉を生徒から引き出すように工夫しました。練習を重ねた二回目の教壇実習では、生徒

の反応もだいぶ変わったので、目に見える形で提示することの大切さが身にしみました。授業中の生徒の反応が、私の予想をしていないものだったので、少し戸惑ってしまうことが度々ありました。しかし、教えてみないと実際の生徒の反応がわからないということが、逆に興味深かったです。

生徒の成長過程を共に過ごし、母国語である日本語の深さをさらに知ることができ、日本語教員は、とてもやりがいのある仕事だと思いました。授業をするにあたって課題はまだ多いです、会話中心の授業を行っている T I J で、生徒の反応を直接感じられる環境の中で実習ができたことは、本当にいい経験でした。短い期間でしたが、ありがとうございました。

獨協大学 中島理絵

T I J での教育実習期間を終えて、今振り返ってみるとあっという間の 3 週間でした。その中で、授業見学や教壇実習、生徒との会話、教材、先生方からさまざまなことからたくさんを学ばせていただきました。

とくに私が印象を受けたのは、T I J の教材や授業のやり方です。教材は、文法ごとにわけのではなく、場面や話題ごとにわけ、そのつど文法や表現が入るようになっていました。学校で取り扱った教材が「みんなの日本語」だったので、授業のやり方も学校での模擬授業とは違うものでした。しかし、実際に授業見学をさせていただくと、身近な話題や場面から授業に入るの、生徒が内容に溶け込みやすいと感じました。私はコミュニケーションを重視する日本語教育のほうが日本語を早く使えるようになって感じていたので、T I J の授業のやり方には大変興味をもち、私もこんな授業をしてみたいと思いました。

最初の授業見学では、先生方の教え方にも様々な方法があるということを感じました。板書の仕方や、絵カードの使い方、生徒との会話の仕方など何人もの先生方のやり方を見せていただいたので、ぜひいいところを吸収したいと思いました。しかし、教え方以上に生徒は「を」と「が」が間違えやすいこと、濁点がぬけてしまうことなど、実際に生徒の反応や間違いを見たり聞いたりできたことが一番の収穫だと思いました。それと同時に、その生徒のミスをどうやって直すか、教えるかは大変難しいと感じました。

このように最初の 1 週間で、教え方や生徒の反応に関していろいろ感じることができました。そして実際に自分で実習をやってみると、「コミュニケーションを重視した日本語教育」をするためには、前もってやらなくてはいけない準備、臨機応変な対応、生徒の発話を引き出す力など「文法を教えるだけ」とは違い予想以上に大変なことだらけでした。私が一番苦勞したことは、どう話したら生徒の発話を引き出せるのかということでした。私は 2 回目の実習で「受け身」を教えました。しかし、私が先に受け身の文をいってしまったり、私が考えていた文とは違う文を言われたりしてしまいました。授業見学で先生方が自然に行っていたことが実際にやってみると大変で、私の話し方で生徒の混乱を招いてしまうということも痛感しました。その他にも生徒の間違いに気づき、訂正してあげることの大切さと大変さも実感しました。このように反省点も多いのですが、笑顔ではきはきと生徒の顔を見て授業をできたこと、一文一文を短く言うこと、なにより生徒と一緒に楽し

く授業ができたことはよかった点だと思っています。

私は今回のT I Jでの実習を通して、ますます日本語教員の仕事は魅力的な仕事だと感じました。その分勉強すること、大変なことは多いと思いますがやりがいは感じられると思いました。そして、このように感じさせてくれたT I Jのみなさんには感謝しています。T I Jの生徒のみなさんが暖かくむかえてくれて、充実した3週間を過ごすことができました。また、熱心に、楽しくご指導して下さった先生方、本当に、ありがとうございます。T I Jに実習にこられて本当によかったです。

はじめよう日本語初中級会話(仮称)について

今までT I Jでは、初級を終わったあとの口頭表現力を育成する教材として「日本語で話そう4」を使用してきました。学生にちょっと複雑な論理を構築する力をつけさせるのに適した教材ですが、作成されてすでに20年経過しているため、今の時代に合わない内容が含まれています。そこで、「はじめよう日本語初中級会話」(仮称)というタイトルで、新しく作成しようということになり、昨年より作業を続けてきました。

このほど、試用版が完成しましたので、10月からの学期で使用したいと思います。一部を本号に添付させていただきますので、ご覧いただき、ご感想、ご意見をお寄せください。

事務局からのお知らせ

「上級で学ぶ日本語」文型勉強会

日時	11月24日(水) 2:00~4:00	11課
	12月20日(月) 2:00~4:00	12課
	1月25日(火) 2:00~4:00	13課
場所	T I J 東京日本語研修所	

参加ご希望の方は、前日までにT I Jにメールまたはお電話でお申し込みください。